

流水と流出原油

オホツク海の沿岸には例年より大幅に遅れはしたが、流水が白い雄大な姿で押し寄せてきている。気象衛星で見ると白い流水の帯が樺太沿いに南に延びて北海道のオホツク沿岸まで埋め尽くしている。

流水とともに魚がやつてくると昔から言われているように、流水の底にはプランクトンが湧き、魚が育ち群れる。流水野はその厳しい自然で漁船を阻み魚を乱獲から守る役目も担っている。冬のオホツク海は自然が自然を育てながら、自らの手で自然を守っている悠久な世界である。

一方、目をペルシヤ湾に轉すれば、湾岸戦争によつて流出した原油の帶が紺碧な海に浮かぶいく筋かの黒いシミとして衛星写真に写し出されている。流出原油の黒い帶は流水と同じよう季節風と海流に乗つて湾の西側沿いに漂流、サウジアラビア沖を南下している。流水の白い帶とは対照的に、この汚染の帶は戦争によつて引き起こされた環境の破壊を象徴がごとく黒いツメ痕となつて見える。

流水の中身をよく見ると、ブラインと呼ばれる無数の泡のようなものが見える。海が凍る時

に塩水だけが凍らずに取り残され故郷オホツクの海をミクロのカプセルに閉じ込め記憶してしまう。

それが流水とともに千キロメートルの旅をして北海道沿岸に届き、流水が融けるとともに消えていく。年々繰り返すブラインの贈り物をみれば自然が昔ながらに保たれているかどうかを差し計る平和の指標とも想える。原油汚染の時も無数の原油ボルの黒い塊が海岸に漂着するが、これも環境破壊に対する自然からのメッセージなのかもしれない。流水のブラインのように原油ボルを割つてみたら『求む平和』という悲鳴とも警告ともつかないメッセージが飛び出てくるのではないか。